

ローカリストの時代

Localist

銭湯再開活気も沸く

北海道で「黄金湯」運営 渡辺 由起子さん(60)

北海道の最北端に近い人口1800人余りの中頓別町に、小さな銭湯があります。いったん閉鎖されたのですが、札幌から来た保健師さんが再開。近隣の町からも客がやって来るようになりまし。小さな食堂のほかミニコンサートや講演会も開き、居心地のいい茶の間のようになっています。

10月10日は「銭湯の日」。黄金湯の開設4周年を地域の人たちが祝った。

もちつきの杵を振り上げていた野島俊介さん(36)は町のスクールバスの運転手。「黄金湯に

来ればだれかがいる。知らない人でもすぐに仲良くなれる空気があるんです」という。

黄金湯では昨年4月から、テーブルが三つあるだけの地域食堂「トントントン」の営業を始めた。野島さんは妻の志穂さんとともに、この食堂の「ワン・デイ・シェフ」。月に一度、厨房に入ってワンコイン(500円)で手料理を振る舞う。

25日の夫妻の料理は「おからコロッケ」。近所の豆腐店のおからを揚げて、家庭菜園でとれたニンジン添えた。用意した15食は売り切れた。「うまくできないのに、懲りずにきてくれる。次はいつ?と聞かれるのがやりがいかな」と野島さん。豊富町や枝幸町など数十ヶ離れた隣町も含め、15人以上のシェフが交代でやってくる。

28日には、中頓別中学の生徒1人が、職場体験としてトントントンでサケ汁を作った。

黄金湯はもともと町営だったが、年間数百万円の赤字続きで、2006年に廃業。売りに出していたのを、札幌市で保健師をしていた渡辺由起子さん(60)が借りた。「健康は人と人との

つながりから生まれる。ここで何かができると思った」

当初は灯油で湯を沸かしていたが、12年末に薪に切り替えた。山には残材が多く、廃屋の古材も使えることを、町の人から聞いていた。運び出して薪を割るボランティアを求めたら、十数人が集まった。夏の間は2カ月かけて、2年分もの薪が銭湯の近くに積み上げられた。名付けて「森のかから」プロジェクト。ボランティアのメンバーは今月に1度、木材のかけらを銭湯の近くまで運んでくれる。「町の人にありがたうと言われるけれど、私たちこ

そありがたいですよ。みんなに喜んでもらえる仕事ができ」とリーダーの長田武志さん(73)は言う。

渡辺さんは「自由起画」という株式会社を立ち上げ、雇用の受け皿にしている。母子家庭や障害のある人が薪運びや風呂掃除を通じ、「社会に参加している」と実感してもらおう狙いだ。全国500カ所以上の銭湯を訪ね歩き、「銭湯博士」と呼ばれる塚田敏信さん(65)も4周年のお祝いに駆けつけた。「他人同士が気軽に声をかけられるコミュニティ」の場が銭湯。人と人を結びつける効果があるんです。

塚田さんのそんなミニ講演を食堂の隅で聞いていた小林生吉町長(55)は言う。「再建はあり得ないと思っていた。毎日のようにホームページで発信して、食堂まで作って文化を育ててきた。驚きの連続で今日まで来ました」

取材を終えて 地域に居場所を

銭湯はもともと、住民たちの交流の場だった。だが、家風呂が増え、この20年間で全国の銭湯の数は半分以下になった。郊外には健康ランドなど大型施設が増えたが、小さな銭湯は消える一方だ。黄金湯に人が集まって来るのは偶然ではない。ちょっとした工夫があるからだ。「ギターが得意」「自慢の手料理を分けてあげたい」……。そんな地域の「才能」を埋もれさせず、しかもお金をかけず

に生かせる場を目指した。過疎が進み、お年寄りが増える地域では、こうした場がより必要になる。銭湯に限らず、居酒屋や集会所だっただけ「居場所」になり得るのだ。が、肝心の住民たちが盛り上がるなければ長続きしない。「どこへ行ってもナカトンの渡辺さんお元気?と聞かれる」。町長が嫉妬混じりにつぶやいていた。そう。どの地域にも渡辺さんのような人がほしい。(菅沼栄一郎)

◆ご意見や情報をお寄せください。ファクスは(03・55565・0837)、メールはlocalist-jidai@asahi.com。



黄金湯のミニ食堂「トントントン」で銭湯博士の塚田さん(手前)のミニ講演会が開かれた。聴衆の左から3人目が渡辺さん=10日、北海道中頓別町